

# 物の特徴を利用したリサイクルを学ぶ

小学生らがキャノンエコテクノパークで環境学習・工場見学



⑤ショールームにある、磁力で鉄を仕分ける作業の体験機を操作する参加者  
⑥トナーカートリッジの実物に興味津々  
⑦分別ミッションに成功！  
⑧鳥はいないかな、と捜索中

キャノンのインクカートリッジなどのリサイクル拠点「キャノンエコテクノパーク」(茨城県坂東市)に4月2日、小学生や保護者ら19人が見学に訪れました。協賛会社のキャノンマーケティングジャパン(ベルマーク番号19)が3～4月の期間、ベルマーク運動参加校などを対象に募集したプログラムです。

まずは環境学習。班に分かれ、物の特徴を利用した分別実験に取り組みます。鉄、アイロンビーズ、黒い小粒状の『なぞのプラスチック』、ビーズの4つの材料を、混ざった状態から道具を使って実際に分別していきます。

使う道具は水の入ったバケツや磁石な

ど。どれを使えばいいか、そのカギになるのは、材料の性質、大きさ、重さといった特徴の違いです。「最初は鉄かな?」「プラスチックは水に浮くの?」。試行錯誤しながら手順を決め、みんなミッションを成功させました。

よりよいリサイクルの材料を作るためには分別を効率よく行うことが大切、と手順のおさらいをした後は、休憩を挟んで見学に進みます。

まずはショールーム。インクやトナーカートリッジを分解・分別する仕組みがパネルで解説されています。実際に分別過程を体験できる機械もあり、子どもたちがスイッチを押したりハンドルを回し

たりして操作します。

そして工場内へ。トナーカートリッジは1日に16トン(小学4年生550人分)も運び込まれるそうで、巨大な機械が動いています。見学通路には分別を経て取り出された「HIPS(ヒップス)」と呼ばれる黒い小さな粒のプラスチックが置かれていました。どこかで見たような……「なぞのプラスチックだ!」。そう、先程の実験で使った材料の1つでした。取り出されたHIPSは、再び原材料として使われます。

インクカートリッジは、紙ラベルを削り、ふた・ケース・インク吸収体などの素材ごとに解体します。「カートリッジ

は使い終わってもインクがもれないので、テープで穴をふさぐ必要はありません」とのこと。テープが付いていると工程からはじかれてしまうそうです。

工場敷地内に飛来する鳥を観察できるバードウォッチングのコーナーにも立ち寄り、約2時間のプログラムは終了。参加者には受講記念の「エコマスター」認定証が贈られました。川崎市から見学に来た4年生の山口翔子さんは、春休みに自由研究の宿題があるそうで、熱心にメモをとっていました。「インクカートリッジやトナーカートリッジの分解がより効率的。すごいなと思いました」と話してくれました。

## 春の鹿児島、ベルマークで楽しく

吉野公園で「推進の会」が恒例イベント

月に1度メンバーが集まってベルマークの仕分けや集計作業をしている、かごしまベルマーク運動推進の会が「第8回春のベルマーク大運動会 in 吉野公園」を3月24日に開きました。クイズとじゃんけん大会を企画し、合わせて400人以上が来場しました。

2012年から鹿児島県立吉野公園の協力のもと、毎年開催してきたイベントです。8回目となる今回は、「1年ためたベルマークだよ」と会場に持ってきてくれた方が例年よりも多かったそうです。

この日の活動の中心を担ったのは、会の代表の板坂4姉妹のうち、菜々乃さんとありささん、そして前代表の平嶺光子さん。全員がベルマーク大使です。イベントを終えて、平嶺さんから活動報告が届きましたのでご紹介します。

◇

クイズの出題は、毎月の整理・集計活動の中で「湖池屋(ベルマーク番号77)のマーク点数って色々あるけれど、実際にはどんな商品についているのかな?」と話題になったことから、それに関連するものにしました。湖池屋のお菓子を5種類用意して、それぞれの商品に何点のマークがついているのかを答えていただきました。

たくさんの方々にご参加いただけるよう、実際の商品を手にとっていただき、マークの点数を書くだけと簡単なものにしました。300枚用意したクイズの解答用紙は午後2時になくなってしまいました。もちろん参加者全員が満点でしたので、満点賞として森永製菓のクッキーや飴をプレゼントしました。さらに「ベルマーク入れ」と書いた封筒にベルマーク一覧表を入れてお渡ししました。

じゃんけん大会は、小学1年生以上の子どもたちを優先に、12時と14時にそれぞれ36人が参加しました。マイクを持ってじゃんけん列車のルール説明や、ベルマーク活動についての説明をしたのは、菜々乃さんとありささん。鹿児島県のPRキャラクター、ぐりぶーも応援に駆け付けてくれました。

菜々乃さんとありささんは「お菓子を配るだけでなく、一覧表も一緒に配ることで、多くの人に活動を知ってもらえたのではないかとイベントを振り返り、その作戦は大成功だったようです。平嶺さんは「400名以上の方々に直接お話をできたことが、この先も続く小さいけれど温かな活動への熱量となることを願うばかりです」と期待しています。



④ヒントをもらいながらクイズに答える子どもたち

⑤「皆さんも被災地支援ベルマークを集めて下さいね」と呼びかけ